

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第126号

令和3年4月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

まさに裏吉野朝といえる全国をめぐる活躍ぶり

## 児島五流山伏頭領を務める風雲児、児島高德

— 「天莫空勾踐 時非無范蠡」 —

### ● 桜の木に刻んだ言葉で有名 ●

講談第2作は「児島高德」です。

児島高德の生涯を大きく分け、船坂峠後醍醐救出劇、隠岐の島後醍醐島抜けのこと、建武政権混乱期の高德のこと、南北朝時代突入期の高德のこと、古ブ国年間諸国に転戦した高德のこと、高德正平年間の戦いのこと、について語ります。

児島高德の生涯を見ると、ありとあらゆる南北朝時代の歴史的な場面に登場し、九州から奥州まで転戦、正行が表吉野朝復権に活躍した武将とすれば、高德はまさに裏吉野朝といえる活躍をしたことが分かります。

講談「児島高德」は、火坂雅志「太平記鬼伝 児島高德」を原作に、鈴木巴勉誠出版「完訳太平記」・岡山県総合文化センターニュース「おかやま人物往来④」・藤井駿「吉備地方史の研究」・井上良信「太平記と領主層：南北朝時代における畿内の戦力について」を参考に、扇谷が脚本を書いたものです。

脚本全文は<http://nawate-kyobun.jp/>に掲載。

### — エピローグ

前回の足利直義に続き、本邦初公開、講談の第二弾は、児島高德であります。どのようなことになりますか、お付き合いのほどよろしくお願いします。

この児島高德ですが、国史上、その存在が疑われる時期もありました。明治二十年代の重野講演や久米論文による児島高德抹殺論がその端緒でありました。

しかし、明治四十年代に入り、田中養成が「歴史地理」に高德復活論を唱えたことを皮切りに、高德実在論が有力となり、大正十一年、八代国治の「児島高德史疑」発表によって復活論はほぼ定着を見るのです。

そして、藤井駿は「吉備地方史の研究」の中で、太平記以外の周辺資料、とりわけ児島高德の一党といえる今木・大富両氏の史料によって、児島高德を実在の人物とした論文は児島ファンにとって必読の書といえるでしょう。藤井は、児島高德と同じく、「太平記」以外の文書記録にその名の発見されなかった今木・大富両氏の根本史料、東大寺文書の中に発見し、その分析によって児島高德の実在は明らか、と実証したのであります。

また、京都大学の井上良信は、太平記の史料価値を分析する論文の中で、太平記の土豪クラスの氏名は、確実な素材立脚による記述で、氏名の正確さを物語ると主張し、児島高德についても、今木、大富ら一族同様に、備前邑久郡の土豪であったことは確認できる、としています。

もちろん、本日は児島高德実在論に基づいてお話を進めさせていただきます。

さて、正成、正行、正義らの楠氏は、いわば吉野朝との関りでは表街道を歩み続け、その名を歴史に刻み残し、多くの人に知られる存在となったことに比べまして、これほど、歴史の表舞台には登場せず、しかし、吉野朝のありとあらゆる場面に関わりながら、後世に名を知られてこなかった、いわば吉野朝の裏街道を、ただ「義」一

筋に走り続け、影の様な存在として生きた人物、児島高德には驚きを飛び越え、感嘆を禁じ得ないのであります。

いわば、歴史の大転換点となった日本史上の三大改革、大化の改新、建武の新政、明治維新の一つに数えられる建武の新政の発端となった、後醍醐天皇の隠岐脱出を見事成し遂げたことに始まり、早くからの足利尊氏からの誘いを受けるも己の「義」ゆえに断り、建武の新政では尊氏と対立抗争を繰り広げる護良親王を支え続け、北国に墜ちていった新田義貞、脇屋義助の軍司として同道し助け、足利政権が内部の対立抗争で揺れ動く中で大いに翻弄されることとなった後村上天皇の政務の支えとなり、更には後村上天皇の意を受け九州に下り懐良親王の九州征政府樹立に貢献するなど、これほどに南北朝時代の要・要の時期・事柄・人物を支え続け、活躍した人物を知らないのではあります。

岡山県は児島をスタートに、東は陸奥の国、西は薩摩の国と、生涯をかけて、日本全国その歩いた距離は、戦国時代の大名に比べてもびっくりするほどの長さになるのではないのでしょうか。

私は、児島高德こそ、南北朝時代を知り尽くし、吉野朝一筋に支え続けた「裏吉野朝」といえる一時代を画した人物として、改めて世に知らしめたいと思う次第であります。

しかし、不思議なことに、正成、正行の楠氏との接点は驚くほどないのです。しかも、修験の道や水運に携わるなど、高德は楠氏に極めて近似し、近い存在であったと思えるのに、であります。

## 一 序章 児島高德プロフィール

太平記、船坂峠の件で有名な児島高德ではありますが、他の資料・文献にその名が登場せず、実に不思議な人物であります。

その太平記の中でも、児島高德は、児島備後三郎高德、児島備後三郎、児島三郎高德、児島備後守高德、三宅三郎高德、今木三郎高德など実に様々な名前で登場します。また、「児島ト河野トハ一族ニテ」とあり、「児島、今木、大富が兵船を揃えて」上洛する件が見えますことから、高德は、和田氏や邑久郡豊原荘の地頭でありました今木・大富両氏や伊予の河野水軍とも同族関係にあり、瀬戸内海に足掛かりを持っていたと考えられています。

また、高德には単独もしくは少人数での行動が多く、主に偵察や攪乱、連絡などが主な任務でありましたよう

で、太平記の「三宅・萩野謀反の事」の件では、將軍を暗殺するため京の都に向かうシーンの高徳の配下にいた人物について、「究竟の忍び」「元来生死不知者共」と書かれていますことから、高德は忍びの統率者であったことを思わせます。また、高德の拠点が児島にあり、この児島は五流山伏の本拠であったことを併せ考えますと、高德は修験道に関係した人物であったことが推測できるのであります。

いずれにしても、冒頭に申しあげました如く不思議な人物であったことは間違いないようであります。そして、播磨・備前・美作三ヶ国の備作地方では、多くの武士が南北朝の内乱期に北朝側に転じて生き延びましたが、児島・今木・大富・和田各氏は一貫して吉野朝側につき、早く歴史の舞台から姿を消していきました。

児島五流系図によりますと、高德の父は、児島五流筆頭の尊滝院を継いだ頼宴、母は備前邑久郡豊原庄の武将、和田備後二郎範長の娘で、三男一女の三男でした。母方の和田家は、東大寺領豊原庄の庄官を務め、瀬戸内海の水運にも携わる備前きつての富裕な家柄でありましたが、範長に男子がいなかったことから、7歳の時、和田家に養子に入り、和田備後三郎高德と名乗るようになったのであります。

さあ、それでは、南北朝時代のありとあらゆる場面に登場し、吉野朝のいわば裏方として全国を駆け巡って活躍しました、児島高德の物語をお聞きいただきましょう。

## 一 船坂峠、後醍醐救出の試みのこと

元弘二年（1332）三月、元弘の変失敗により等置城が落城し、囚われの身にあった後醍醐が隠岐に配流されることとなります。

千葉介貞胤、小山五郎左衛門、佐々木堂警が道中の警護を命じられ、東洞院から南へ向かう後醍醐の姿を見た京中のあらゆる人々は、「臣下の身でありながら、天下の主であるお方をお流し申し上げるとは、嘆かわしいことよ。幕府の命運もこれまでか」と、憚りなく云う声が巷に満ち、嘆き悲しんだのであります。

後醍醐は、桜井の宿を過ぎるとき、東に見える石清水八幡宮を伏し拝んで、再び京の都に帰還できるようにと祈ったといわれています。一行は、湊川から須磨の浦、明石の浦、高砂と進み、杉坂峠を越えて美作の国、今の岡山県津山市に入ります。さて、この続きはまたのお楽しみに！（文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭）